



ゆうこみやぎの

なるほどアイヌ文化エッセイ

ソッコ de ソッコ



アイヌ文化のことをもっともっと話したい！
本田優子と村木美幸の二人が、
その魅力を交代で執筆する
ソッコ(=お便り)形式のエッセイです。

Vol.75

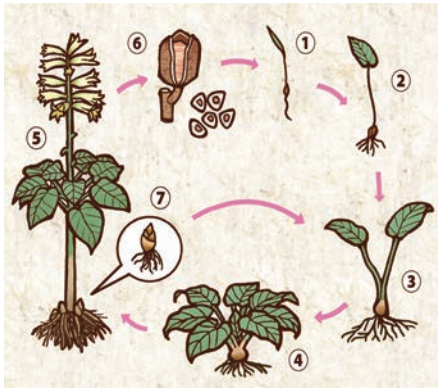
今月のテーマ
トウレプ(オオバユリ)命の環



本田優子
(札幌大学教授)

オオバユリはユリ科の植物。土の中に「ユリ根」とも呼ばれる鱗茎があり、そこから採れる澱粉はアイヌの人たちにとって本場に重要な食料でした。加工の過程で数種類の澱粉が作られ、二番粉はとろみをつけたりお粥に入れたりしたけど、白くてサラサラの一番粉はお腹が痛い時のお薬にもなったの。澱粉を採った後の繊維も、発酵させた後、丸いドーナツ状にして干して保存食にしました。

ところでフチ(おばあさん)たちは、「花



参考資料：「アニマ別冊「フローラ 香科植物」平凡社1987年刊行」
イラスト／莊田悠人

が咲いているオス(雄株)は掘ったらだめ。葉っぱだけのメス(雌株)を掘る」っておっしゃってた。私は、「普通は花が咲く方が雌株なのに、逆なんだ…」と不思議に思いつつも、雄株と雌株は違うものだとばかり思ってたの。ところがある時、植物学者・河野昭二先生(かわのあきひで)の文章を読んでびっくり。オオバユリは発芽してから何年も一本葉の状態です。成長し(①)二本葉になり(②)、そして鱗茎が二番大きくなった(③)、翌年、一気に茎が伸びて花が咲き(④)、種になるのです(⑤)。つまり、フチたちが言うオス⑤は前年のメス④が花を咲かせたもの！五〜七年もかけて少しずつ鱗



次回のテーマは「アイヌ語地名散歩―ベツ/ナイ編―」村木美幸(アイヌ民族文化財団理事)が担当します。

茎に澱粉を蓄え、最大値に達した翌年、そのすべての栄養を使って花を咲かせ(だから鱗茎の澱粉はすっかり無くなる)、子孫を残すのです。なんてステキな命の環。面白いのは、⑥の根元にくっ付いている小さな「娘鱗茎」⑦。この娘からも翌年芽が出るんだけど、なんと本葉の数年間で飛び越え、一気に二本葉。とても効率が良いのです。それに比べて種の方は発芽率も悪いし一年目はモヤシみたいにヒョロヒョロ。つまりオオバユリは子孫を増やすために、種と娘という2種類の方法を持っているというわけです。どうして？
実は、親が死んでしまうほど環境が激変した時、親と同じDNAしか持っていない娘と一緒に消えちゃう。ところが種の方は、受粉して親とは違うDNAを持っているから環境の変化に強いし、風に乗って遠く場所へ移動もできたりする。これこそ、オオバユリのしたたかな生き残り戦略なのです。植物って本場にカシコイ。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみやぎ):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■莊田悠人(しょうだゆうと):平取町二風谷生まれ。漫画家兼イラストレーター。幼い頃のアイヌ文化が原風景。東京在住。